



FIELD NOTE

no. 86 Sep.

特集

川がまちを つくってきた

フィールド・ミュージアムのたのしみ 第29回
カワガラスの生活史

川がにぎわうお盆の風習

コラム

都留の川辺に暮らすカエルたち

フィールド暦

教えてください！遊びの思い出 第一回
川で遊べば

FIELD・NOTE CONTENTS

no.86 Sep.

特集

川がまちをつくってきた

06 フィールド・ミュージアムのたのしみ 第29回
カワガラスの生活史

08 川がにぎわうお盆の風習

10 コラム
都留の川辺に暮らすカエルたち

11 フィールド暦

12 教えてください！遊びの思い出 第一回
川で遊べば

15 特集まとめ

16 駅での出会い

18 カエルの成長記

20 花さかじいさんの贈りもの

22 関わりを大切にする人

25 センサーカメラが写した動物たち

26 田んぼを見る

28 通り過ぎる景色のなかに

30 ご主人の変わらない思い

32 戦争中の都留の風景

34 色をとりだす

36 「加藤大吾さん」という人

38 絵から見えるもの

40 ご近所買い物事情

42 駒の世界と挑戦

45 FIELD・NOTE NEWS

表紙写真

北垣憲仁：写真

都留市鹿留で撮影した水中の写真です。森の豊かな栄養を下流へ運び、人やさまざまな生きものを育みます

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。



特 集

川がまちをつくってきた

あるお寺の奥さんとのたわいもない会話。
そのときに奥さんがぽつりと言った。

「川がまちをつくってきた」

なぜだかその言葉が心に残った。
どういう意味だろう。

すぐに浮かんだのは

都留市に流れる用水路のこと。

その昔、谷村の城主が桂川から水を引き
用水路をつくったことで

まちが豊かになったという話。

ただ、その言葉の背景にあるものは
それだけだろうか。

ひとりがなにげなく聞いた話。
けれどこれをみんなが追求したら
なにかが見えてくる気がした。

川で営まれてきた人々の、
そして生きものの暮らしを探ること
この言葉に込められた意味を
考えてみようと思った。

カワガラスの生活史

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

西教生（本学非常勤講師）＝文・写真



親鳥と一緒に水辺で過ごします。巣立った直後は風切羽や尾羽がまだ伸びきっておらず、親鳥よりもやや小さく見えます。

行動圏を調べる

行動圏とは、ある種がある期間に利用していたすべての範囲のことです。私は柄杓流川のある場所で、カワガラスの行動圏を調べることにしました。いつも見えている個体が、川の上流と下流のどこまでを生活圏にしているのかを知りたかったからです。カワガラスは河川に沿ったある範囲を行動圏にしています。たとえば、繁殖期の行動圏を調べると、ヒナを育てるためにはどのくらいの広さが必要なのかわかります。

動物の行動圏をきちんと調べるには、個体識別をしないといけません。個体識別されたある特定の個体を追跡調査し、どんな場所で生活しているのかを把握するためです。野生の鳥類や哺乳類を許可なく捕まえることは違法ですので、環境省から許可を得て、カワガラスを捕獲して色足環をつけて調査をおこないました。2012年1月、1羽のメスの左足に赤色の足環をつけました。その後、巣



左足に赤色の足環をつけたカワガラス

カワガラスは河川の上流部や溪流で生活をしていて、そこから離れることはほとんどありません。つまり、市街地や森林、海などでは見られない鳥です。種名に「カラス」とつくりますが、カラスの仲間ではありません。

カワガラスは水中の水生昆虫や小魚を捕って食べます。食物の捕りかたは、顔だけを水中に入れる場合と、水中に潜って捕る場合の二通りがあります。日本に分布するスズメ目というグループのなかで、おもに水中で食物を捕るのはカワガラスだけでしょう。移動するときも川の流れの上を低空で飛ぶことが多く、水面から10m以上の高さのところを飛ぶことはまれです。全身が焦げ茶色をしているため、水中の石などの色と似ており、水辺ではこれが保護色になります。

それでは、山梨県都留市の柄杓流川（ひしやながし）でこの調査から明らかになった、カワガラスの生活史を見てみましょう。

繁殖は早春から

カワガラスの繁殖は早春から始まります。1月ごろからさえずりがよく聞かれるようになり、1月下旬から2月には巣材を運ぶ姿が

を中心に川の上流と下流のそれぞれ何メートルを行動圏にしているのかを調べました。同年3月の調査では、巣から上流に600mまでが行動圏になっていました。同年4月は、巣から上流に430mまでの距離を行動圏としていました。同年11月は、春にあつた巣から下流に450mの範囲で生活をしていました。翌年の2013年2月の調査では、営巣場所から上流に120m、下流に400mの距離を移動していました。

季節によって行動圏の広さは変わると考え



橋の下の巣

見られます。私は積雪のある厳冬期も胴長（胸まである長靴）をはいて水中で調査をするのですが、寒さで爪先が痛くなります。しかし、カワガラスは真冬でも、ほかの時期と変わりにくく川に入っています。

巣はコケを多く使い、川沿いの崖や滝の裏側、橋の下などに作られます。カワガラスの巣はドームのような形をしているため、ツバメやホオジロなどのように巣の上側が空いていません。そのため、巣のなかを観察することはできません。

3～4月は子育ての時期で、ヒナは4月下旬から5月に巣立ちます。巣立ち後のヒナは、

られますが、柄杓流川で調査をしたメスの行動圏の長さは、平均500mでした。この値は、ほかの地域で実施された調査結果の範囲内でしたが、かなり狭いのが特徴です。柄杓流川のカワガラスの行動圏が狭いのは、周辺のメスの個体数を考慮する必要があるものの、食物量が多いことが一因であると思います。つまり、生息地に食物が多いことが、このような行動圏の狭さをもたらしていると考えられます。

河川環境の指標

都留市を流れるもつとも大きな河川は桂川です。市内では桂川のどこでもだいたいカワガラスが見られます。しかし、隣の大月市から東に進み、相模湖に近づくにつれカワガラスの個体数は少なくなります。この辺りは桂川の中流に位置し、河川が広く、勾配が緩やかです。上流にくらべて河川の石は小さくなります。中流には、上流とは異なる河川の環境があります。こうしたことが、カワガラスの個体数に影響していると考えられます。川に出掛け、もしカワガラスを見かけたら、そこは河川の上流部であるといえるでしょう。

川がにぎわう お盆の風習

伊藤瑠依（社会学科3年）Ⅱ文・絵



8月13日、たくさんの人が我が家を訪れ、お酒を酌み交わす。お祭りのようににぎわう、そんな地元のお盆が大好きだった。ただ、こういった風習は地域によって違うもの。都留の人々はどのようにお盆を過ごしているのだろう。うかがってみると、おもしろい風習を耳にした。

川に流された馬と牛

お盆におこなう風習のひとつに、きゅうりを馬に、なすを牛に見立てたお供えものを作る、というものがある。この動物たちの作り方はお宅によってさまざま。大家さんのお宅では、きゅうりとなすの反った部分が底になるようにして、動物の足に見立てた爪楊枝を4本刺す。これを8月13日、仏壇にお供えするそう。作るわけは諸説あるが一説には、先祖の霊がやって来るときは早く来てほしいから馬を、帰るときはゆっくり帰ってほしい

から牛を作るといふものがある。

霊が帰るといふ8月16日。この日都留の多くの人々は、お供えた馬と牛、おにぎりなどをもって川へ向かう。これらを流すためだ。「昔はこんな小さいおにぎりを3つもつくくよね」。そうおっしゃる大家さんの右手には、親指と人差し指を合わせて作った、小さな丸ができていた。これは「仏さんの弁当」だと謂われていて、死後の世界への帰り道に食べられるように、という思いが込められているという。訪れた者を帰りがちまで気遣うこの風習は、生きている人に対してもつおもてなしの心と変わらないように思えた。

川はどうへ

ただ、そのようにお供えものを流していたのは以前の話。大家さんが田原に引越す前の昭和61年ごろまでのことだそうで、その後は川が汚れるのを防ぐため、ものを流すことは禁止されたそう。そのため現在、大家さんは檀家になっている普門寺にこれらのお供

えものをもって行く。

では川を使っていたころは、どこに流していたのだろう。じつさに自分の目でその場所を見れば、当時のようすをより理解できるかもしれない。そう思うかがつてみると、家のすぐ近くを流れる川だと大家さんはおっしゃる。しかし、大家さん自身、以前住んでいた上谷のほうへ長らく行っていないこと、そして昔とは土地のようすが変わってしまったことから、川の間所を明確にすることはできなかった。後日、大家さんの言葉を頼りに見当をつけたのは、上谷4丁目にある路地。そこに立ち並ぶ民家を探ねると、当時の川の姿が浮かび上がってきた。

当時その路地は、リヤカーが一台通れるほどの農道で、その横にあったのが、幅2mほどの用水路。あるお宅では、窓を開けたすぐ下にこの用水路があったそうで、子どもがおもちゃを片付けないでいると、そこにおもちゃを捨ててしまおうとしたという思い出話をうかがうことができた。また何人かに尋ねていると、この水路にお供えものを流してい

たと言うかたもいらつしやったことから、大家さんのおつしやっていた川はこのあたりだろう。現在その川は道路拡張に伴い、幅は狭められ、コンクリートの下を流れている。なくなつてしまつたわけではないけれど、以前のように、川は手近な存在ではなくなつてしまつていた。

* * *

私たちの身近な場所から川が離れ、制約もできてしまつた今、以前とまったく同じように風習をおこなうことは難しい。じつさい川に流す風習はなくなつてきているし、この先を考えればますます形は変化していくだろう。

この風習は何かを買うわけでも、わざわざ遠くの場所に行くわけでもなかった。家の畑で手に入るような旬の野菜と家から数歩先にある川。それさえあれば、風習をおこなうことができていたのだ。だから私は思う。簡単で無理なく続けられることだからこそ、風習となりえたのだと。

フィールド暦

川遊びがしたくなる夏。
そんな時期に水辺でみつけた生きものを紹介します。
『フィールド・ノート』編集部=文・写真



オオヤマカワゲラ

体長は3cmほどで、5月から7月にかけてみるができます。
夏狩(2015.5.20)



サワガニ

川岸近くの流れがゆるやかなところの石を裏返すと、よくみつかることができます。夏狩(2015.5.20)



バイカモ

1cmほどの小さな白い花が咲きます。清流にしか生息することができません。夏狩(2015.5.20)



トノサマガエル

金山神社前の田んぼで発見しました。体の中央に入っている白い線が特徴的です。上谷(2015.6.18)



カワトンボの仲間

翅の茶色と胴体の水色がとても鮮やかです。ほかのトンボよりもゆったり飛びます。下谷(2015.6.18)



ヤマメ

水のきれいな川の上流に生息しています。透き通るような体が印象的です。戸沢(2015.7.11)

コラム

都留の川辺に暮らすカエルたち



カエルは水辺を離れて暮らすことができません。それだけに川辺とも密接な関係をもっています。都留の川辺にはどのようなカエルが暮らしているのでしょうか。
フィールド・ミュージアム=文・写真

現在、日本には43種のカエルが住んでいますが、このうち山梨県では11種(2005年山梨県レッドデータブック)、都留市では絶滅が危惧されるトノサマガエルを含め9種が確認されています。本学の学生のなかには、梅雨時期のニホンアマガエルの賑やかな鳴き声が強く印象に残っているという人も少なくありません。

カエルは幼生(オタマジャクシ)時期には水中で生活し、成体になると陸に上がり林や森のなかで暮らします。カエルが生息するには、水辺と森の環境とが良好に保たれていることが欠かせません。

桂川(相模川)の源流に位置する都留市では、川辺に暮らすカエルの種類も豊富です。たとえばカジカガエル。6月から8月にかけて昼間の川辺で聞こえるフィフィフィーと連続した鳴き声は、一度聞くと忘れられないでしょう。しかし、同じ川でもカジカガエルが多い場所とまったくいない場所があります。水質や水温、水の流れなどわたしたちが気づかない微妙なちがいをカジカガエルは察知しているにちがいません。

さらに川辺に暮らすカエルにナガレタゴガエルがいます。本州では関東から近畿にかけて分布していますが、どこにでもいるわけではありません。おもに標高が300mから1000mほどの山地の川辺の森をすみ処としているようです。

山梨県で確認されているカエルの約82%が都留市に生息しているのは、田んぼだけでなく湧き水や渓流など水辺の環境が多様であり、それを取りまく森が残っているという証でしょう。

都留に住むカエルたち



ヤマアカガエル



モリアオガエル



シュレーゲルアオガエル



ニホンアマガエル

※ほかにも都留市内には、トノサマガエル、アズマヒキガエル、タゴガエルの生息が確認されています。

カジカガエル



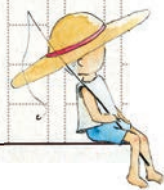
4月から8月にかけて川のなかの岩の下に産卵します。この時期オスは岩の上で鳴きながらメスを誘います

ナガレタゴガエル



川の流れが激しい場所で産卵するためか、ほかのカエルに比べると後ろ足の指にある水かきが大きいのが特徴です

川で遊べば



「僕たちの子どものころなんかね、遊び道具は自分たちで作ってたんだよ。そんな言葉聞いたのが昔の遊びを知りたいと思ったきっかけだった。そこにはどんな思い出がまつているのだろう。今回は川遊びに焦点を絞って、三人のかたがたにお話をお聞きした。

川遊びと言ったら

6月20日、最初は都留市郷土研究会の佐藤滋^{しげ}さん（85）と武井^{たけい}一郎^{いちろう}さん（88）に、後日、安富^{やすふ}一夫^{かずお}さん（88）にお話をお聞きした。三人が子どもだったころにしていた、川での遊びと言ったらどんなものがあつたのだろう。

まずは、佐藤さんと武井さんが小学生だったころのお話。当時小学校にプールはなく、泳ぎに行くのはもっぱら桂川だったという。武井さんが当時を懐かしむように視線を上に向けた。

桂川と言っても、子どもたちはそれぞれ自分の遊び場を決めていて、武井さんはお城山の北東側のふもとにある「したはけ」と呼ばれる場所で遊んでいたそうだ。そこは当時、町や村の人がだれでも泳げるようになってお



左が佐藤さん、右が武井さん。私が質問すると少し考えたり、二人で確認しあったりしてお話してくださった

り、脱衣所も設けられていたという。大人は深いところで泳いだり、小さい子は下流の浅いところでバシャバシャと遊んだり。夏の暑い日にはもってこいの自然のプールだった。

「桂川の水は冷たくてね、泳いでるとこの辺が（唇を指さして）紫色になってくるんだよ。そうすると丘が上がってね、大きい岩に抱きついて、甲羅干しみたいに」。そう言つて抱きつく仕草をしながら武井さんが話してくださいました。

私はそのようすを簡単に想い描けた。なぜ



なら、私も夏になると毎日のように実家の目の前に流れる川で遊んでいたからだ。水の冷たさに我慢できなくなったら、岸辺にある石でできた階段でいったん休憩。その上で足を伸ばせば、夏の暑い日差しもあいまって体の芯から暖まる。自分の思い出とお二人の記憶が繋がっていくような感覚がして、気づかないうちに体を前のめりにしてお二人のお話を聞いていた。

カジカとりの思い出

武井さんと佐藤さんに「カジカつての知ってる？」と聞かれた。「あれをね、めんつていつてね、四角なもんで下にガラスが張つてあるの。それでのぞくと川底までよく見えるわけ」と佐藤さん。そうやってカジカを探して、鉄製の3本頭のもりで突いていたのだという。「子どもだからとるだけだったね。とるだけじゃ楽しかった」。お二人は顔を見合わせておっしゃった。

わかるわかる、と私は頷いていた。そう、とるだけで十分心が踊る。網で捕まえた魚やザリガニ、ドジョウ。ついさつきまで川のな



安富さん。私の目を見ながら一つひとつのエピソードを教えてくださいました

かにいて姿が見えなかった生きものたちが、自分の目の前に現れる感じ。友だちに自慢したくなるような気がするのだ。

安富さんもカジカとりの思い出を話してくださいました。まず教えてもらったのは、瀬回しと言つて、2本に分かれた川の一方に石を積み、すきまにクレソンなどの水草をつめてふさぐこと。そうすると止めた先が干上がつて川底がむき出しになるのだ。そうして、水がほとんどなくなった川でカジカをとっていたのだという。

こんくらの竿、と両手を肩幅より少し大

きく開いて見せてくださる。安富さんはもりではなく釣り竿を使っていたそうだ。「そこにね、ウスバカゲロウの幼虫をつけてカジカ



「めん」と「もり」

の鼻先にもつてくの。そうするとばくりと食いつく。もりでつくのも面白けれど、鼻先にもつてくるとばくんと（食いつく）。

また、安富さんはカジカをとるだけではなく、食べていたそうだ。おいしいんだあこれが、と顔を傾ける。そうして私のほうを見て、食べたそうな顔してるな？と一言。知らないあいだに口が半開きになっていたようだ。カジカの食べかたを話す安富さんの表情を見ていたら、自然と口のなかに唾液が溜まってくるのがわかった。

「めんだつて自分たちで作ったんだよ」と安富さん。板や、ガラスと板を接合するときを使うパテを買ってきて、父親や兄弟に手伝ってもらいながら手作りしていたという。

川がまちをつくってきた

「川がまちをつくってきた」。どうしてこの言葉が、なにげない会話のなかから出てきたのだろう。

いつでも水の音が聞こえるほど近くにある水路で、その土地独自の風習が生まれる。歩いて行ける場所に天然の遊び場があり、毎日のように子どもたちが集まる。生活の一部に川があることは、都留の人々にとって見慣れた光景となっていた。そんな川とともに生きてきた都留の人だから、この言葉がふいに出了と思うのだ。

長年都留に暮らす人にとっては、川があることは当たり前に見えるかもしれない。けれど私たちには、いつでも人に寄り添う川が新鮮なものとして映った。それが、まちの個性に思えたのだ。「川がまちをつくってきた」。この言葉は、川で育まれてきた命や伝統や思い出、そのすべてがまちの個性をつくり出すと教えてくれた。



私は木の実などを使って工作をすることはあったが、そんな大掛かりなものを作ったことがなかった。自分で遊ぶために作るのだから大切に使用していたのだろうと、作っためんを使ってカジカを探す少年の姿の安富さんを想像した。

僕だけの水族館

佐藤さんも自分が川遊びをしていた場所を教えてくださいました。城山に行く途中に川棚橋という橋があったそう。その橋の近くの河原が、佐藤さんがよく泳ぎに行っていた場所だ



プラスチックの水槽でのぞくとまるで水のなかにいるように見える

という。「めんで見るとね、自分で見た人だけの水族館に見えるんですよ。その、見た子どもだけの水族館ってね」。その日は佐藤さんの表現の仕方に驚くばかりで、その光景をうまく想像できなかった。

後日、じつさいに私も川にめんの代わりのプラスチックの水槽を持っていき、試してみることになった。水槽を川の水面に押し込むようにして半分くらいまで沈め、顔を近づけてみる。水槽で切り取られた川底は水面の上から見るよりもずっとくっきり見えた。日の光を反射して石がちらちらと光る。川が深くなっているところに水槽を向けると、ヤマメが数匹群れて泳いでいるのが見えた。本当に水族館のようだ。角度を変えたり見る位置を変えたりするだけで水槽のなかが変わって別物になる。佐藤さんの言葉がもう一度頭のなかに浮かんできた。自分だけの水族館はどれほど見ていても見飽きないものだった。

川遊びというのは

武井さんと佐藤さんは、お話の後にしたはけと川棚橋の位置を地図で教えてくださいました

た。「この辺がしたはけだね。僕らが泳いだところ。僕らの古戦場だ」。そう言って、口の端を少し上げて笑ってみせた。まるで少年が秘密基地の場所をこっそり打ち明けるように。「今度したはけ、行くんだつたら案内するよ」と武井さん。すぐに、ぜひお願いします、と言っていた。

夏の暑い日に冷たい川のなかを、足で水を切りながら歩く爽快感。獲物を探して川底をじつとのおぞとときのぴりりと緊張した感覚。川遊びには遊んだ人にしかわからない楽しさや高揚感がある。今回三人のかたがたのお話を聞いて感じたのは、自分とは違って、遊び道具を手作りしていたことへの驚きもあったが、川遊びに夢中になっているときの共感のほうが強かった。それは私にとっても川が身近な存在で、遊び場だからかもしれない。三人のかたがたがしてきた川遊びはそんなに遠くかけ離れたものではなく、遊び仲間がこんな遊びかたもあるんだと教えてくれたもののような気がした。

長尾泉（初等教育学科2年）文・写真
金原由佳（社会学科3年）写真
南條新（初等教育学科2年）写真

駅での出会い



都留文科大学前駅で、笑顔がすてきな駅員さんに出会った。そのかたは、駅で会うたびに笑って挨拶をしてくださる。駅員という仕事や笑顔の秘訣が気になって、私はその駅員さんにお話をうかがうことにした。

めぐりあい

駅員さんのお名前は椎名^{しいな}静江^{しずえ}さん（40）。温和で親しみやすい笑顔が印象的なかただ。椎名さんは都留で生まれ育った。駅員になるきっかけをつくったのは富士急行のタクシーの運転手さん。椎名さんが仕事がなくて困っていたころ、スーパーで買い物をしていた椎名さんに駅員の仕事をすすめたそうだった。言われるまま面接をして、見事採用されたという。タクシーの運転手さんと出会っていなかったら駅員にはなっていなかったと、当時のことを椎名さんは「めぐりあい」と表現された。おかげで楽しく仕事ができていると椎名さんは語る。

駅員になって

いろいろな人と出会ってお話ができる。椎名さんは駅員の仕事の魅力をそのように話してくださった。さまざまな人が駅を利用する。

いろいろな人と関わっていると、人は十人十色だということを実感するという。駅員の仕事で苦労されていることはないか尋ねると、「苦労って忘れちゃわない？」とさらっとおっしゃった。苦労話が当然あると思っていた私は呆然としてしまった。苦労を忘れられる心の強さや明るさを椎名さんは持っているのだと思う。

いつも笑顔の印象がある椎名さんだが、安全確保のためには乗客を厳しく注意することもあるそうだった。たとえば駆け込み乗車。駆け込み乗車は危険だけでなく、ドアの開閉に遅れが生じてほかの乗客にも迷惑がかかるため、駆け込み乗車をしようとする人には注意して改札で止めるという。椎名さんはいつも笑顔なのかと思っていたので、厳しく注意するというのが想像でできなかった。

お話のなかで、椎名さんは1枚の写真を見せてくださった。椎名さんの去年の誕生日に高校生たちがケーキやシュークリームをプレゼントしてくれたときのものだ。窓口の外にプレゼントが並び、その後ろには笑顔の高校生が見える。当時高校生だった椎名さんの娘さんの友達が、椎名さんの誕生日を知ってい

て「おばちゃんおめでとー！」とお祝いしてくれたのだ。駅でよく話をしていた高校生たちからのプレゼントに泣きそうになっただけでなく、この仕事をやっていてよかったと思っただけだ。「本当に嬉しかった」と何度も言いながら笑顔を浮かべる姿を見て、私はじんわりと心があたたまるのを感じた。ふだんから笑顔で自分たちの話を聞いてくださっていた椎名さんへ、高校生たちから感謝が還ってきたのだと思う。

駅とは

駅は利用者が癒される場所であってほしいと椎名さんはおっしゃる。駅に立ち寄って、愚痴を言ってくれるだけでもいいという。「愚痴を言うことで」スッキリして電車に乗ってお家に帰って、嫌になつたらまたここにきて愚痴を言ってくれればいい。なかには愚痴を言うために駅に来る人もいるそうだ。椎名さんと利用者の距離の近さに驚いた。

また、椎名さんはある特別な思いを持って本学の学生に接してくださっているという。「一人暮らししている人には『おかえり』と



駅事務室から椎名さんは利用者とお話ししてくださる

か『いつてらっしゃい』って言いたいじゃん。これは、一人暮らしであることが多い本学の学生の寂しさを和らげようとしてくださる気づかいだ。「ただいま」や「いつてきます」と言えるもうひとつの家をつくってくださいている。

笑顔の力

最後に、笑顔でいられる秘訣をお聞きすると「ムツとしているとムツとした返事で返ってくるし、笑って挨拶していると笑って挨拶

が返ってくる」とおっしゃった。椎名さんは笑って挨拶が返ってくるのがとても嬉しくて、また笑顔でいようと思うことができるという。たしかに笑顔の椎名さんとお話していると自然と自分も笑顔になっていた。笑顔は笑顔を生むのだ。そして、「笑っていられるのってみんながいるからじゃないかな」とも。みんなとは、駅に来るあらゆる人のことだ。椎名さんは人と話をすることで笑っていられるという。みんながいるから笑っていられるという発想は私にはなかったのだ、とても新鮮だった。

今回お話を聞ききっかけとなった椎名さんの笑顔。その笑顔のおかげで、駅に来る人たちは椎名さんと気兼ねなく話すことができるのだと思う。「いい出会いしてます！」と椎名さんは力強くおっしゃる。いい出会いをつくり出しているのは、椎名さんの笑顔なのだろう。人との出会いをつくり出す。そんな笑顔の持つ力を椎名さんは教えてくださった。

カエルの成長記

3月10日、中屋敷の池でヤマアカガエルの卵塊を1つ見つけた。去年も卵塊を見つけたが、気がついたときには成体になってしまっていた。カエルは成体になるまでにいろいろな姿を見せる。どのような過程を経て成体になっていくのかが気になり観察してみた。

小俣溪和（社会学科2年）＝文・写真

南條新（初等教育学科2年）＝写真



3月11日



昨日は1つだったカエルの卵塊が3つに増えていた。これからの成長が楽しみだが、この量の卵が全部オタマジャクシになって、この池にいると思うと、少し怖い気もする。

3月23日



卵の黒い部分が丸い状態から魚のような形に変わっている。形が変わった部分がくねくねと反るように動いていた。大きくなるための準備運動のようにも見える。

4月15日



卵がかえっていた。茶色い池の底が黒く見えるほどたくさんのおタマジャクシがいる。まだ卵のものも多いが、なかの動きが活発なのでそれももうすぐかえりそうだ。

4月21日



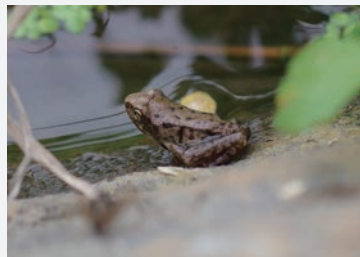
前は1cmぐらいだったオタマジャクシが3cmほどになっていた。池のなかの数か所に集まって黒い塊のようになっている。1匹捕まえて近くで見るとまるまるとして可愛い。

6月14日



足が生えているオタマジャクシを見つけた。まだ2cmくらいのおタマジャクシや成体もいるのに、足が生えているものもある。なぜ成長の早さに違いがあるのだろうか。

6月14日



右と同じ日に、10匹くらい成体も見つけた。池のなかを泳いでいるものもいたが、池の岸にある岩の上に乗っている成体のほうが多い気がした。

6月14日の観察を終えたあと、7月22日にカエルを見に行った。しかし池にもそのまわりにもカエルの姿は見当たらなかった。いったいどこへ行ったのだろう。気になってヤマアカガエルの生態を調べてみると、ヤマアカガエルは森林とその近くの水辺に棲み、産卵の時期になると水辺に出てくるそうだ。

後日、本学のうら山を歩いているとき、足元にヤマアカガエルを見つけた。このカエルもどこかの水辺で育ってここにきたのかもしれない。中屋敷の池で育ったカエルも、いまはどこかの山のなかにいるのだろう。

カエルの成長の過程を見たいと思って始めた観察。見に行くごとに姿を変えていて、今日はどんな姿になっているかと楽しみにしながら観察に行っていた。そしてそのときにどんな行動をしているのかが知りたくて観察を続けていた。カエル

の成長段階のなかで一番動きが活発だったのが、卵のなかの黒い部分が魚のようになったとき。そのときの動きが成体になるための準備運動のように見えた。いつのまにか大きくなくていくのだと思っていたが、成体になるために頑張っていたのだと思う。

観察を終えたあとに、このカエルたちがまた中屋敷の池に戻ってくるのだろうかと思った。疑問に思うことが出てきたということは、カエルについてさらに知ることができるきっかけを得られたということだ。この観察でわからなかったことを知りたい。だから来年もカエルがきたら観察したいと思う。今回知ることができなかった疑問は解決するのだろうか。新たに不思議に思うことが出るのだろうか。カエルがまたやってくるのが楽しみだ。

【参考書籍】

川崎吉光

『山溪ハンディ図鑑9日本のカエル』
山と溪谷社 2003年

花さかじいさんの贈りもの

都留で初めて花屋さんへ

4月、入学してまもないころ都留のまちを散歩していたときに見つけたのが「花さかじいさん」というお店。店内には花屋、雑貨店、カフェがある。私はまず、このお店のつくり自体に興味を持った。入口はカフェと花屋の2カ所があり、わたり廊下でつながっていて、その廊下には雑貨が並べられている。どちらの入口から入ってもお店の奥まで見通すことができる、区切られていない開放的な空間。最初私は花だけを目的としていたが、雑貨に惹かれ奥へ。さらに、スイーツやパフェなどの甘い香りに惹かれカフェへ。本来の目的を忘れ、目移りしてついつい長居したくなる場所だ。

今回は花屋に注目して、お話をうかがった。6月30日、花屋のドアを開けた瞬間、森に迷い込んだのかなと思うほど視界いっぱい緑が広がる。多くの観葉植物が置かれていたため、店内はみずみずしい香りに包まれていた。そしてゆつたりとした洋楽のBGMが心地よく、取材に対する緊張が和らいだ。

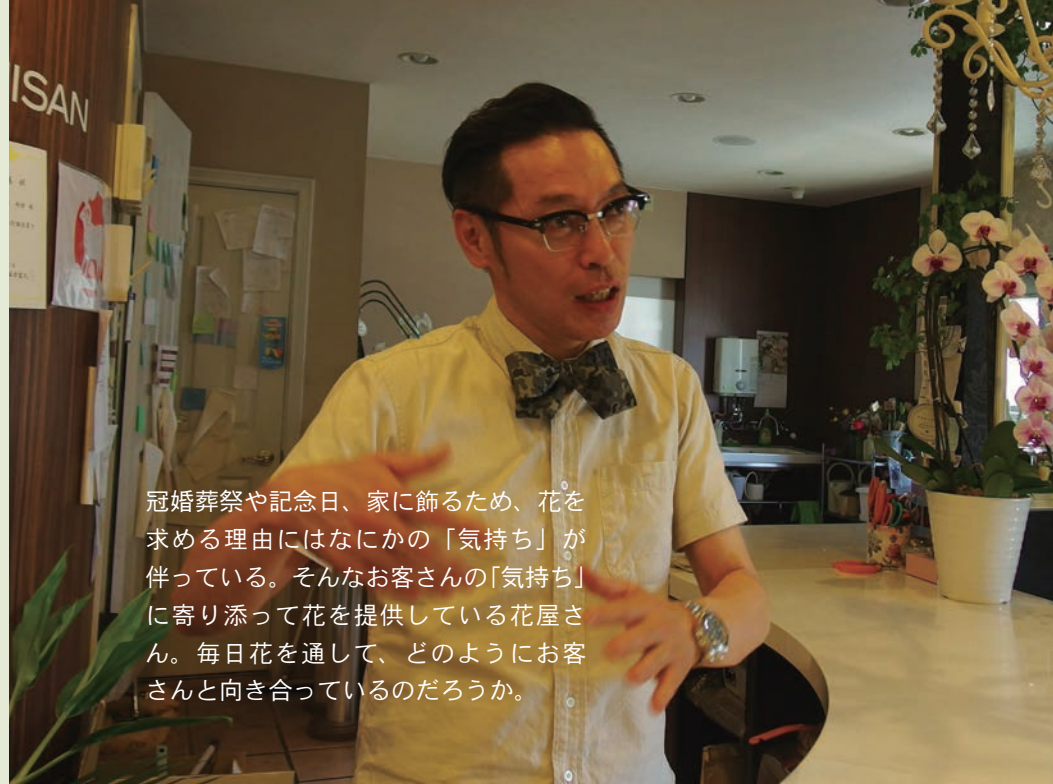
花屋のオーナーである小河原利修さん



(48) にお話をうかがおうとすると、店の外へ案内された。入口のひさしの内側にできたツバメの巣を見せてくれたのだ。ふつうはお店の壁には泥がつき、地面にはツバメの糞が落ちて汚れてしまうため、巣を取り除いてしまう。しかし、小河原さんは「屋根を閉じると巣が壊れちゃうからね」と、気をつかってひさしはずっと閉じないでいたそう。そんなところに私は小河原さんの優しさを感じた。

地域に馴染む

小河原さんが花屋を営もうと思ったきっかけは、友人の紹介で花屋に就職したこ



冠婚葬祭や記念日、家に飾るため、花を求める理由にはなにかの「気持ち」が伴っている。そんなお客さんの「気持ち」に寄り添って花を提供している花屋さん。毎日花を通して、どのようにお客さんと向き合っているのだろうか。



お店の外観。左から順にカフェ、雑貨店、花屋になっている

と。そこでの経験や先輩の影響を受けて今に至るそう。お店の名前は、そのときの先輩の提案で「花さかじいさん」になった。「○花屋だと覚えにくいかなって。とにかくくさんの人にすぐ覚えてもらいたいし、インパクトあっていいでしょ」と、はにかんでおしゃっていた。経営を始めた当初は10坪のテナントで、現在地より都留バイパスを東に進んだ交差点の前にあった。そこでは6年間続けていたという。今の場所に移転したのは18年前。そして、奥様がカフェを営みたいとい

のことで4年前にお店を増築した。お客さんの層は子どもから大人まで幅広い。安くて美味しいカフェには学生が多く訪れ、土日には親子連れが増える。花屋に訪れるお客さんのなかには、わざわざ大月から週に1回のペースで通っている老夫婦もいらつしやるそう。将来はさらにお店を大きくしたいと考えている小河原さん。しかし、お店周辺はもちろん、わざわざ遠くから来てくださるお客さんがいることで、今の場所にとっても愛着が湧いているという。そのため、お店を別の場所に移転させるつもりはないそう。

こだわりのラッピング

花さかじいさんの魅力はなにか。小河原さんに尋ねたところ、花束や鉢のラッピングとおっしゃった。奥様が材料を選択し、小河原さんが作っていく。カウンターの奥にあるカラフルな包装紙は、きれいな花をいっそう引き立たせるためのものである。ラッピングは誕生日のかたの年齢や雰囲気聞いていき、それに合わせて作っていく。また、花を贈ったあとの処理の仕方まで考えてコンパクトに

作るなど、工夫が満載だ。ここまで考えながら作業をおこなうとかなり時間がかかってしまうのではないかと私は思った。しかし、お客さんを待たせないようにと短時間(じつさに拝見したときには5分ほど)で完成させていたことに驚いた。お客さんのさまざまなリクエストにできるだけ応え、お客さんの喜びの声や表情を見ることが自分たちの喜びにもつながっていくのだと小河原さんはおっしゃる。

私はただ見映えだけを気にして花を選び、ラッピングをしているのだと思っていた。もちろん見映えも大切だが、小河原さんはもう少し深く情報を引き出すことによって、よりお客さんの求めているイメージに近いものを作っているのだ。どんな花や植木でも気持ちを和らげる力を持っていると私は思う。しかし、小河原さんのこだわりのラッピングが完成したものは、世界でたったひとつの贈りもののように感じた。ただの買いもののひとつでなく、小河原さんの贈りものに期待を抱き、たくさんのお客さんがここに足を運ぶのだと思った。

関わりを大切にする人



都留市駅周辺に住宅とお店が混在して立ち並ぶ三町商店街。前号では、三町商店街を盛り上げたいという想いを持つ喜和田屋の古屋喜正さん^{よしまさ}取材した。これをきっかけに私は、三町商店街の人たちをもっと知りたいと思った。そこで今回、ある一軒のお店を尋ねた。

そのかたのお名前は、金巻裕さん^{かねまきゆうさん}（49）。ナカムラ薬局の店主さんであり、学生たちと一緒に、商店街の活性化をおこなっているからだ。初めてお会いしたのは5月ごろ。都留に来たばかりの私に、三町商店街についてお話してくださった。お話はとても分かりやすく、ときどき冗談を言って笑いも交えてくださり、私は夢中になって聞いていた。なぜ私が金巻さんを取材しようと思ったのかというと、堂々と話す姿や声に迫力を感じ、金巻さんのことをもっと知りたくなったからだ。

金巻さんのいまで

お店の名前と、金巻さんの名字が違うことに気づき、理由を尋ねた。すると、「すごいところから入ってくるねえ、質問」と笑っておっしゃる金巻さん。「ここで生まれ育った

人間ではなくて、よそから来た人間なんだ」という返事に、自分の耳を疑った。

金巻さんは、24年ほど前、東京の化粧品メーカーでサラリーマンとして働いていた。そのときにナカムラ薬局の担当で、都留に営業に来ていたという。そのうちに薬局の娘さんとは縁があり結婚したそう。奥さんだけで経営するのは大変だからと、サラリーマンを辞めて、都留に来てお店を手伝い始めた。

私は、地域を元気にしようとする人は、そこで生まれ育った人だけだと思っていた。それは、私が今まで出会った地域おこしをしているかたが、その地域で生まれ育った人だったからだ。金巻さんが地域を元気にしようと、イベント活動を学生と一緒に考え行動している姿を見ると、ほかの地域から来た人とはまったく思えない。

しかし、金巻さんも最初から地域を元気にしようと思っていたのではないという。都留に来てから半年間くらいは、週末になると東京に帰っていたそう。それは、以前住んでいた東京と、環境や地域の決まりごとが違い、戸惑いがあったからだという。お話のなかでも「何回も『なにこ』と思ったね」と、

当時のことを振り返り、少し小さい声でおっしゃった。

そんなあるとき、20歳から40歳までの人が集まる、地域おこしの団体に入らないかと誘われた。そこには、金巻さんと同年代のかたが大勢いたそう。都留に知り合いも友だちもいなかった金巻さんにとって、同年代のかたと出会えたことは嬉しかったという。「地元が大好きな人たちで、都留市をどうやってよくしようかと考えている姿に刺激された」と話してくださった。「このきつかけのおかげで、今の自分があるね。もし出会っていなかったら、ここにいなかったかもしれない」とおっしゃる金巻さん。私は、偶然の出会いや出来事が人の人生を大きく変えるのかもしれないと思った。

三町の魅力とこれから

金巻さんにとつての三町商店街の魅力はなに尋ねた。金巻さんは、「三町商店街に限らず商店街は、商売をしている人がそこ（商店街）に住んでいて、自分も含め、そのお客さんでもあることだね。あと、人が優しいことも魅力だよ」とおっしゃる。なるほど、



店内は化粧品などが多く並んでおり目移りしてしまう

と私は新たな商店街の魅力を発見した。

さらに、三町商店街が大きな家族であると感じた。こう思うのは、私が三町商店街を訪れたとき、お店のかたが優しく話しかけてくださったからだ。「ちゃんとご飯食べてるの？」と家族のように心配もしてくださる。こんなふうに声をかけてもらえると嬉しくなった。

また、常連のお客さんが多いことから、お店のかたはお客さん一人ひとりの、よく買っていく物や必要としている物を把握している。「あれが欲しいんだよね」という言葉で、なにを買いたいのかわかるという。一部のお店では、買い物に来られないときには、電話で注文を受け、配達もおこなっているという。

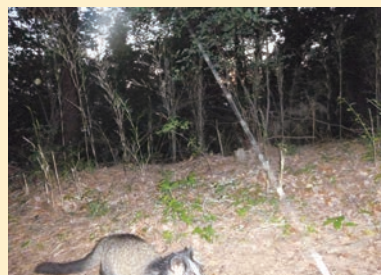
センサーカメラが写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムではキャンパス周辺にセンサーカメラを設置して動物の調査をしています。ここでは 2015 年 5 ～ 6 月に本学うら山で撮影された動物を紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



ニホンジカ (5月19日)
子連れのニホンジカが撮影されました。林床ではニホンジカが食べたと思われる植物がいくつも観察できます。



ハクビシン (5月27日)
鼻筋の白いラインと黒く長い尾が特徴的です。同じ場所を行き来する姿が頻繁に撮影されています。



テン (5月28日)
顔が黒っぽい夏毛へと生え変わり始めています。背中の一部も、黒くなり始めているのが見て取れます。



ニホンカモシカ (6月2日)
昨夏以来およそ1年ぶりの撮影となりました。うら山では深夜帯(2時31分)に撮影されるのは初めてです。



トラツグミ (6月6日)
年間を通して撮影例があり、うら山での繁殖の可能性があります。夜中にヒョーヒョーと鳴く声を聞いた人は多いかもしれません。



ツキノワグマ (6月24日)
明るい時間帯に2回撮影されました(6月17日18時10分、6月24日15時40分)。今の時期は草木が茂り、見通しが悪いためクマへの注意が必要になります。

三町商店街は、地域の人を見守って生活している場所であると感じる。このことから、家族のようだと感じた。

これからどんな商店街を目指していきたいかと尋ねると、「難しい質問するねえ。でも、これが一番大切なことかもしれないね」と私の質問について真剣に考えてくださる。しばらくの沈黙の後、「わざわざ来てもらえるような商店街にしたい。一軒一軒のお店が、『これはほかのお店には負けない』という、一番になるものがあつたら、自然とそこは栄えるだろう」と答えてくださった。しかしじつさいは、自分のお店を守っていくことでいいんじゃないかってしまい、地域のことで考えられないこともあるそうだ。「みんなの意識を一つにすることは難しい。それでも、笑顔で楽しく、イキイキと活動していれば、その場所には自然と人が集まる」。私も楽しそうにしている人のところに行きたくなる。気がつく、私は金巻さんのお話に何度も頷いていた。

金巻さんにとってのお客さん

お客さんに対する金巻さんの想いを尋ねると、「こういう厳しい時代になつてから、お

客さんに感謝の気持ちを持つようになったね」とおっしゃった。お客さんのなかには、大月市や富士吉田市のほうから来てくれるかたもいるそうだ。ナカムラ薬局に来るまでに、いくつもの薬局があるにもかかわらず、わざわざ来てくれることがとても嬉しいとおっしゃっていた。これからも、選んでもらえるお店であり続けたいと、笑顔で話してくださった。金巻さんの言葉から、お客さんを大切に想う気持ちがにじみでていた。そうした気持ちは、サラリーマンとして営業をおこなっているときは、感じたことも考えたこともなかったという。お客さんのことよりも、自分の成績や会社のことを重視していたそうだ。



お客さんの相談に真剣に対応している金巻さん

また、お話を聞きにお店へうかがったとき、

金巻さんがお客さんの目を見て対応する姿を見て、感じたものがある。それは、大型店ではないお店だからこそ、一人ひとりのお客さんのことをよく知って、大切にできるのだということだ。

金巻さんはお店の経営をしながら、三町商店街の活性化もおこない、お店と商店街の両方を同じように大切にしている。三町商店街の人たちの抱える問題や、気持ちを理解しながら、どうしたら人が集まる商店街になるのかを考えている。そんな金巻さんのお話だからこそ、聞いていた私も夢になったのだ。

金巻さんのお話を聞いたことで、たくさんの人との出会いや関わりが人をつくっていると感じた。私という人間も、たくさんの人との関わりが重なって、できあがっているのだ。生活していくなかで、関わる人が多いほど、新しい考えかたや、人との繋がりが広がっていく。だから私は、より人との関わりを大切にしようと思った。

芦川菜摘(社会学科1年)＝文・写真
廣瀬はづ紀(社会学科4年)＝写真

田んぼを見る

都留市立病院の近くには見渡す限り田んぼと畑が広がっている。毎週火曜日の朝9時ごろ、私はその畑のひとつに水やり当番としてかよっていた。作業をしたあとは、畑と田んぼに囲まれた道を歩いて帰る。そうやって1ヶ月ほど過ごした。

南條新(初等教育学科2年)=文・写真



ホウネンエビ。お腹に卵がついている。田んぼの底に映る影は魚のようだ

最初の発見

6月2日の朝、水やりをしているときに、一緒に来た友人が近くの田んぼで不思議な生きものを見つけた。それはメダカみたいな形で黄土色をしている。とくに不思議なのは泳ぐ姿。なんとヒレのようなものをうねうねとくねらせて泳ぐのだ。

図鑑で調べてみると、それはホウネンエビという生きものだった。ミジンコと同じ仲間、ラッコのように仰向けで泳ぐのだとか。うねうねしていたのは足の部分。ダンゴムシが背泳ぎしているようにも見えた。身近に感じていた田んぼに、こんなに奇妙な生きものがいるとは思わなかった。

きつとそれは、田んぼの生きものを今までじっくり見たことがなかったからだ。実家でも都留でも、家の裏や通学路など、田んぼは生活のすぐ近くにある。けれど私はいつも横を通過するだけで、田んぼにいる生きものをじっくりと見たことがなかった。田んぼで生きものを観察すれば、きつと新しい発見がある。そう思っ、水やりの帰りは田んぼに寄ることにした。

田んぼはたまり場

田んぼを見ると生きものでいっぱいだ。水やりに行くたび必ず会うのがカルガモだ。いつも田んぼの真んなかあたりにいる。カルガモは全長60cmくらいの水鳥だ。何だかずつしりして見えて、飛ぶのが大変そう。田んぼのなかへ入っていくと、水面に顔を近づけたのか姿が見えなくなる。カルガモは雑食性なので、虫か何かを食べに田んぼへ来ているのだろう。

しゃがんで田んぼを覗く。コオイムシという2cmくらいの水生昆虫がいて、イネの根元につかまっていた。アマガエルは葉と葉のあいだでくつろぐようにじつとしていて。水に落ちたガか何かにアメンボが群がるようすは、まるで磁石に砂鉄が引き寄せられるようだ。見るたびに必ず生きものがいて、田んぼは想像していたよりも賑やかだった。

育てる人にとって

田んぼの持ち主のかたや、近くの畑で仕事をするかたは、自分よりも田んぼへ頻繁にかよっている。それならそこにいる生きものに

ついて話が聞けるかもしれない。そう思っ、田んぼのすぐそばで畑仕事をされている、厚原農園のみなさんにお話をうかがった。

生きものについてお聞きすると、今はカエルが鳴かないとおっしゃる。カエルがいるとかタニシがいるとか、そういった言葉を想像していたので、予想しなかった返答にわくわくした。ほかには、オタマジャクシやゲンゴロウ、イナゴなども見かけなくなってきたのだとか。昔と違って、今の田んぼは農薬で消毒をする。私がかよっていたあたりの田んぼのように、広くて整備された田んぼならなおさらだという。そのせいか田んぼに集まる生きものは昔と比べて少なくなつたそう。

ほかには、米作りをするうえで関わる生きものの話をしてくださった。農家のかたとつて、生きものにイネなどの作物を食べられることは悩みどころだそう。たとえばドロムシと呼ばれる虫。ドロムシは水滴のように小さくて、イネの葉にくっついていて。そして、イネの葉の栄養を吸って生活している。だから米作りをしている農家のかたからするとやつかない生きものなのだ。逆に「カエル

はいたほうがいい」とみなさん。カエルが増えれば、イネを食べる虫を食べてくれるので、使う農薬を減らすことができるのだ。

同じ田んぼの生きものを見ても、私と厚原農園のみなさんとは着眼点が違った。私はいつも自分好みの生きものを見ている。鳥や魚といった特定の生きものが好きなのではなく、自分の目を引くような変わった生きものが好きだ。だから、見つけたときはその生きものだけに注目している。いっぽう厚原農園のみなさんはイネを育てることを念頭に置いて生きものを見ている。私と違って、趣味というよりも仕事。ある作物を食べる生きものや、その生きものを食べる生きものについてのお話をしてくださった。

農家のかたの視点のような、自分になかった視点を知る。すると、今までに見た生きものを自分とは違う視点で見ることができ、もつとじっくり観察したくなってくる。そして生きものの新しい一面を見られたら、何にも代えがたいような高揚感を得られるだろう。自分とは違う視点に立つことが、生きものへの興味を膨らませるのだ。



右)カルガモが2羽どこかを見つめていた。このあと田んぼのなかへ入っていく、何かをついばむようすを見せた

左)ドロムシ。日光に弱く、泥を背負って乾燥を防いでいるという。指で撫でると泥がとれて全身が見える。ドロムシはイネの栄養を吸い、イネは吸われた部分が白くなる

通り過ぎる 景色のなかに

都留バイパスを東へ下り、西願寺前交差点を左に曲がったところにある天神社。6月上旬、私はそこを訪れた。入口に鳥居はなく、石段が続いている。奥にはいったいどんな神社があるのだろう。



入り口にある標柱。奥へと石段が消えていくように見える

気になった場所

入口にある2本の標柱しめすちのあいだを通り石段をのぼってみると、不揃いで歩きにくいことに気がつく。それに先が見えないくらい長く続いていて、すぐに本殿が見えなかったことに私は少し戸惑った。

本殿は、すべての石段をのぼりきったところに建っていた。ザワザワという木の葉がこすれる音のみが聞こえる。本殿の手前には一対の灯籠があり、右片方は倒れている。それらは人の形をしていないというのに、まるで本殿を守る二人の番人のように感じられた。休むことなく石段をのぼったので、息が上がつっていた。私はのぼり終えてから休もうと思っていたが、そこでは番人のような灯籠に見張られているように感じてしまう。怖くなった私は、お参りもせずに入口へと引き返した。

天神社の歴史

帰った後も、あそこはどのような神社なのだろうという疑問がずっと胸のなかに残った。その疑問を解決したいと思い、『都留市社記』の天神社に関する記録を読んだ。「建仁三年

(一一〇三年)の創立」とある。もしそれが本当のだとしたら、あの神社は800年以上の歴史を持つことになる。800年前といったら鎌倉時代初期のこと。とても長い時間で、その長さははっきりと想像がつかない。そのあいだになくなってしまいう建物があるにも関わらず、あの神社は昔からあそこに建っているということに驚いた。

また私は、地元の神社に詳しいかたがたに、天神社のことを尋ねた。初めに都留市郷土研究会の内藤恭義ないうちのやすよしさん(83)にお話をうかがった。内藤さんは、入口に鳥居でなく標柱があるのは、天神社を祀まつる上天神町と下天神町の財力の問題だったのではないかとおっしゃった。しかし資料に具体的な記述はないため、はつきりしたことは分からないという。

つぎにお聞きしたのは金毘羅神社こんびらの宮司である金子壽元かねこひさもとさん(57)。金子さんは、石段が富士山の熔岩でできていること。また、硬い熔岩を人が手作業で造ったものなので不揃いだが、機械によって造られたものよりも味があるということを教えてくださった。石をきちんと石段の形にするのは簡単なことではない。まして階段にするために数多く造るの

は並大抵の労力ではなかっただろう。

それらの歴史を知ってから、私はあらためて神社を見に行くことにした。

再度神社に行く

正直に言うと、一回目に訪れたときの怖さを思い出して、あの神社に行くことを少しためらった。しかしじつさに訪れてみると二度目ということもあって、少しだけ私はその場所の雰囲気慣れていた。

一回目に来たときは灯籠と本殿のみ意識していたが、二回目は周りにも目がいく。本殿前の広場には落ち葉が積もり、その上を歩くとふかふかと柔らかい。一回目に来たときには気がつかなかった柔らかさを意識すると、この場所が森のなかに建つ、なんだか落ち着く場所のように感じた。

今度はきちんとお参りをした。当時の人たちも私と同じように手を合わせてお参りをしたのだろうか。昔の人は私にとって遠い存在だった。けれど、私もこの神社にお参りに来ていた人たちと同じことをしているとすると、昔の人を近くに感じた。

私は神社が好きなので、今までさまざまな

神社を訪れてきた。しかし、これまで私は神社に行くとき、その神様についてしか考えなかった。けれど初めて神社自体を調べてみたことで、神社に関わった人たちの存在に気がつくことができた。

疑問を持つこと

場所自体は何も変わっていないのに、一回目と二回目で感じたことが違う。おそらくそれは、「ここはどんな神社なのだろう」と疑問を持ち、調べたからなのだと思う。もしかしたら日ごろ何気なく通り過ぎている場所を、もう一度訪れ、そこについて調べてみると、また違った気づきがあるのかもしれない。

いつも挨拶をする地元の人たち、通り過ぎているだけの建物。あの人は何をしている人なのだろう。なぜあの建物はそこに建っているのだろうか。ふだん見ている景色のなかに疑問を持つことが、私の知らない発見につながっていると思うとわくわくする。遠くにある特別な場所に行くのではなく、毎日過すごしている景色のなかに、新しい気づきを見つけていきたい。

川原岬(国文学科1年)Ⅱ文・写真



本殿は斜面の中腹に建っている。下に敷かれている石も熔岩でできていた

ご主人の変わらない 思い



都留バイパスからおかじま食品館へ行く道沿いにあるラーメン屋「八宝」。カウンターの向こう側で料理をつくりながら、私と友人の話を笑って聞いているご主人。しかし、話しかけると物静かなご主人は気になる存在であった。

6月24日、雨の上がったむし暑い昼下がり
に「八宝」を訪れた。入口のドアがこの日は
全開になっている。店内をのぞいてみると、
こちらを向いて足を組み、新聞を読んでいる
ご主人の姿が見えた。先客はいないようだ。
あいさつをするとうご主人は新聞を片付け「あ
あ、はいはい」と言いつて立ち上がった。
店内にはL字のカウンター席にイスが10席
ほど窮屈そうに並んでいる。私は入口から
真つ直ぐ進んで、一番奥の席に腰を下ろした。
さきほどからご主人は、厨房と私の背後にあ
る冷蔵庫とを行ったり来たりしてせわしく働
いている。私が取材を始めるタイミングを見
計らっているとお手製の梅ジュースを出して
くれた。飲むと梅の甘味と酸味が、暑さと緊
張で乾いているのどをうるおす。ご主人は「梅
にハチミツだけ、砂糖は使っていません」と
視線を合わせずに言い、カウンターを挟んで
座つてタバコに火をつけた。

お店を出すということ

ご主人の名前は山本幸博さん(66)。ノー
トに書いてもらった名前と生年月日は、罫線

関係なしに大きく、ノートに跡が残るほど
しっかりと書かれている。「八宝のおじさん」
という呼び名で本学の学生から親しまれてい
る山本さん。ラーメン屋を始める前は、横浜
市で建築のお仕事をされていた。1989年
に母親の地元である都留市に引っ越して来て
から10年間は、始発電車で横浜市へ行き最終
電車で都留市に帰ってくる生活だったとい
う。そして、今から17年前に建築の仕事をや
め、「八宝」を開店した。お店はずつと山本
さんが一人で切り盛りしている。

前職とは異なる飲食業の世界へ飛び込み、
お店を出すのは相当な覚悟が必要だっただろ
う。そう思い尋ねると、意外なことに覚悟は
全然なかったという。「ふつうにやっていた
飯が食えるなつていう自信がありました
から。(建築の仕事は)毎日が命がけでした。
それに比べればストレスは溜まらないし、お
客さんに言いたいことを言っているし」と頭
をかいて笑った。「それにラーメンは素人
でもすぐできるんです。自己流なものをもつて
ましたから。簡単な、ラーメン」と片手を
ひょいっと返し水切りが済んだ麺を器に移す
動作をしておどけてみせた。

お金儲けより安心・安全を

ラーメンのこだわりについて、山本さん
は恥ずかしそうにすぐには教えてくれな
い。しばらくしてから、「安心して食べられ
ること」だと教えてくれた。お客さんが「山
本さんがつくっているのだから安心して食べ
られる」と思えるように、真心を込めてラー
メンをつくっているのだという。というのも、

山本さんは飲食店を始めて、ラーメンには案
外危険な添加物が使われていることを知った
そう。こんな危険なものが入っている料理を
家族やお客さんなど、自分の大切な人に食べ
させることはできないと思った。だから、八
宝の提供する料理には添加物が一切使われて
いない。「自分が食べないものを、お客様に
提供して、いやあ儲かったなあつていうのは
ちよつと恥ずかしいですよね」。そして、「私
はぼろ儲けを放棄したから。そうすると楽で
すよね」と言つて、はつはつはと大きく笑った。
お金儲けよりお客さんに安心・安全な料理
を提供したい。そう思っている山本さんはお
金には無頓着だ。「利益率とか一切計算した



八宝のおもなお客さんは本学の学生。本学
には全国からいろんな舌をもつ人が来るた
め食べやすく飽きない味が基本だという

ことない。最終的にあらゆる支払いを終えて、
あーこれだけ残ったんだあ。今のスタイルだ
とこれだけ残るんだあという感じ」。経営者
としては失格ですけどね、と笑つて付けたし
た。利益にはつながらないけれど、お客さん
の反応を見ながら、「今度はもう少し味を濃
くしてみよう」などと味を試行錯誤するの
がおもしろいと言う山本さん。少しずつ味を改
良していき、今の味にたどり着いたのだと教
えてくれた。

ご主人の思い

お店を経営していて嬉しいことを尋ねる
と、「あなたみたいな素敵なかたと一緒に

茶ができること」と茶目つ気たつぷりに答え
た山本さんだが、しばらくしてから姿勢を正
してこうおっしゃつた。「お客さんにおいし
いと言われることはもう第一。素人から始め
て、認めていただいたんだなあ」と感謝の気持
ちです。また、おいしいという言葉は聞
くと、あらためて、お金儲けをすることより
も、自分が胸を張つて提供できるものをお客
さんに出し続けたいと思うそう。

* * *

私は今まで山本さんのことを、いつも物静
かだが、たまに冗談を言つてくる「話して
みると調子のいいおもしろい人」としか思つ
ていなかった。しかし今回お話を聞いて、
お客さんのことをなによりも第一に考えて
いることを知った。山本さんはお店を始め
てからずつと変わらず、その思いを強く持
ち続けている。約15年以上も変わらない「お
客さん第一」の思いこそが山本さんが「八宝」
を経営している原動力なのだ。

戦争中の都留の風景

ミュージアム都留では、平成 24 年度より都留文科大学地域交流研究センターと共同で、『わたしとあなたの都留アルバム』事業』に取り組んでいます。ここでは、そのなかから、戦時下で撮影された古写真と、写真にまつわる記憶を紹介します。

森屋雅幸・知念浩生＝文・写真
古写真は地域交流研究センター所蔵



昭和 15 年（1940）撮影



平成 27 年（2015）6 月 27 日撮影

法泉寺前で撮られた田原婦人会の防空訓練時のもの。モンペ姿に防空頭巾を身に着けている。男性が戦場に駆り出されるなか、国内の社会や生活をたもったのは女性たちだった。太平洋戦争のころの写真には、女性たちが防火訓練をする姿が見られる。



昭和 17 年（1942）撮影



平成 27 年（2015）6 月 27 日撮影

西涼寺前で撮影された、^{ぼんしょう}梵鐘供出を写した写真。金属供出は一般家庭や工場からが主だったが、文化財にも及ぶようになった。昭和 17 年（1942）には美術的、文化的価値の高いものをのぞき、寺院の仏具梵鐘に対しても強制供出令が出された。

今回の企画展の冒頭で、祖父の家で保管されていた上海事変で戦死した曾祖父の弟の遺品を展示しました。遺品は亡くなる 1 年前、昭和 6 年ごろの手記や写真でした。いずれも焼け焦げていますが、これは家が火災に遭ったとき、曾祖父が持ちだしたためと聞いています。これらが入った紙袋には遺品であることを示す祖父の墨書きが添えられています。二代にわたってこの遺品を伝え残そうとしたことがよく分かります。私は遺品を通して曾祖父の弟の戦死という事実だけでなく、戦争とは何かという問いが、痛みとともに心に浮かびました。曾祖父たちが私たちに伝え残したかったものを確かに受け取った気がします。企画展を通して、こうした問いが戦争を知らない世代の心に芽生えることを願っています。（森屋）

関連イベントに参加しました



遺髪塚。空襲の犠牲者を弔うため建てられた

7 月 25 日から 9 月 13 日にかけてミュージアム都留で開催された企画展「戦後 70 年 都留・あなたが見つめる戦争」の関連イベントに参加しました。これは都留から大月にかけての戦争遺跡を歩くというものです。行願寺の遺髪塚、保寿院のアツツ観音、仲町大神社の満州南都留分村殉難の碑を見学し、大月の学芸員のかたや住職さんからお話を聞き、戦争時の悲惨さを感じました。（編集部）



撮影年不詳（日中戦争初期と思われる）



平成 27 年（2015）6 月 27 日撮影

旧谷村町役場前で撮影された提灯行列の様子。戦勝を祝う人々が火をともした提灯を持ち、列を組んで街路を練り歩いた。兵士への武運長久を祈る旗が旧谷村町役場に架けられ、町ぐるみで戦争に参加していた様子が見える。



昭和 12 年（1937）撮影



平成 27 年（2015）6 月 27 日撮影

日中戦争初期に戦没した兵の村葬の様子。場所は現在の^{かせい}木生駅。村葬は町、村民こぞって参加し盛大におこなわれた。戦況の悪化で戦没者が増え、葬儀を執りおこなう責任者も出征や高齢化で少なくなると、式も小規模なものに変わっていった。



昭和 13 年（1938）撮影



平成 27 年（2015）6 月 27 日撮影

現在の都留市商家資料館前。バケツリレーで防空演習をする新町隣組の人たちを写した写真。2 階にあった手すりには、昭和 16 年（1941）に制定・公布された金属回収令に伴い、銃器などの材料にするため供出された。



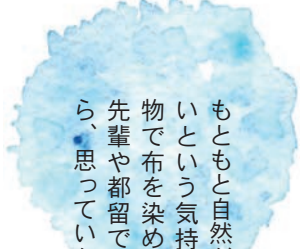
昭和 13 年（1938）6 月撮影



平成 27 年（2015）6 月 27 日撮影

谷村高等女学校校庭に集合した国防婦人会を写した写真。現在の谷村第一小学校。割烹着を着たうえに、たすきを右肩から左脇下にかけるのが通例だった。国防婦人会は戦地にいる兵士に送る物資の準備や防火訓練などに従事した。

色をとりだす



もともと自然が好きだった私は、植物を使ってなにかしたいという気持ちがあった。そこで興味をもったのが、植物で布を染める草木染め。じっさいにやったことのある先輩や都留で染め物の仕事をしているかたのお話、本から、思っていたよりも簡単にできることを知った。

加藤萌香（初等教育学科3年）＝文・写真

草木染めのやりかたはいくつかあるらしい。今回は細かく切った植物を煮て色を出したところに布を浸し、色を染み込ませる。その後お湯にミョウバンを混ぜたミョウバン液に一晚浸けた。ミョウバン液には、染めた色を定着させたり、発色を良くしたりする効果がある。

アジサイ



まず挑戦したのは淡い青色のアジサイ。この花と同じような青色に布が染まったら素敵だろう。そんな思いから選んだ。花を一房切りとりじっくり見てみる。がくは淡い青一色だと思っていたけれど白い部分もあったり青色ががくの脈に沿って広がっていたりと、色が少しずつ違っていた。今まではただ眺めて

いただけだったが、手にとつて見てみると新しい発見がある。

ちぎった花と布をお湯に入れ、箸で混ぜていると、いつのまにかお湯がレモン色になっている。あまりにもゆつくりと色が出たので気がつかなかった。青い花からは青い色が出てくると思っていたので驚きだ。青色が出ないものかと、煮ている花を箸の先でぎゅうぎゅうと何度か押しつぶしてみる。すると花から透きとおった藍色が少しずつ滲み出て、お湯のなかに広がっていく。黄色のお湯と混ぜて黄緑になり、やがて花より少し濃いくらいの青色となった。布をとり出し、一晚ミョウバン液に浸けてから乾かす。しかしミョウバン液のお湯を多くしてしまつたため、思つた以上に色が抜けていた。せつかく染み込んだ色が出ていつてしまい、さみしい気持ち

ちになる。できあがつた布は薄い水色になってしまった。

もつと濃い色に染めたいと思い、今度は花の量を倍にして挑戦。花を煮出していると、お湯は薄いハチミツ色から濃い飴色になった。まったく予想していなかった色が出てきたものだから思わず目を疑ってしまう。しかも花の量を倍にしたはずなのにお湯の色は前回よりも薄かった。失敗をふまえ、なるべくお湯の量を少なくしたミョウバン液に浸した。できあがつた布は前回より薄い水色。ミョウバン液に浸けた布は一晚のうちに水色に変わったようだ。予想外の変化に再び驚かされる。

工夫はしたものの、結局、濃く染まらないどころか、むしろ前回よりも薄くなつてしまった。けれど、思つてもいなかった色の

変化も草木染めの魅力と思えば嬉しくなり、その意外さについてそう興味を惹かれた。

クロモジ



次に挑戦したのはクロモジの枝と葉。すつと鼻に抜けるような爽やかな匂いが特徴の木で、私のお気に入りの植物のひとつだ。枝は3cmくらいに切り、葉はそのまま使った。

お湯のなかで枝と葉を押しつぶすように混ぜる。5分ほどするとお湯が少しくすんだ黄緑色になった。同時にむせかえるくらい甘い香りがしてくる。クロモジはすつきりとした香りだと思っていたから、甘い香りも含まれているなんて思つてもいなかった。煮ていると、水蒸気とともに香りがあがってくるので、ふつうに嗅いだときよりも強く香る。そのため、甘い香りがわかつたのだろう。

できあがつた布

アジサイ

1回目



2回目



クロモジ

1回目



2回目



できあがつた布はミョウバン液に浸けたこ

とで発色が良くなつたためか、煮出したときよりも明るい黄色になった。煮出しているときは色が薄くて本当に染まるのか不安だつたけれど、できあがつたものは私が思っていたよりも濃く染まっていた。

こちらももう一度染めた。手順は同じにし、前回はそのまま入れた葉を今回は細かくちぎつた。すると煮出したお湯は黄色よりも黄緑に近くなり、できあがつた布はクリーム色になった。布をよく見ると黄緑が混じっているようにも見える。葉の緑色が強く出たためだろう。

染めあがつた布はじっさいの植物の色と同じにはならなかったけれど、全体的に優しい

色合いになった。手にとつて眺めていると、

今までの驚きや発見を思い出す。私は植物を煮出せば見た目どりの色が出てくると思つていた。けれど見えている色だけが出てくるのではなかった。染める過程のなかで淡い青色のアジサイから黄色が出てくることがあつたり、クロモジのように見た目とは違う色に染まることもあつたりする。表面からは見えない色が植物のなかに潜んでいたのだ。

また草木染めは、その工程のなかで染まつた色を楽しむだけのものではなかった。近くで見るとわかる植物のようすや、煮出していて気がつく色の変化や香り、そしてどんな色に染まるのかという期待。できあがるまでの工程すべてにさまざまな楽しみがあり、植物の新たな魅力を知るときつかけとなった。

【参考書籍】

ファグ武蔵『カントリーホーム手作り 教室4 草木染めを楽しむ 身近な素材で彩る』山と溪谷社 1996年



加藤さんが飼育している鶏と羊

びの場をつくっている。そのなかで、自然農法を学ぶイベントを開催したり、都留環境フォーラムという環境を軸としたまちづくりを考える団体の理事長を務めたりと、活動は多岐にわたる。そんな活動のなかで、たくさん子どもや親と接してきた。そして、この親がいてこの子どもだなあと、とても思ったという。「わかりやすいよ。ほんとに」と笑う加藤さん。教育学や心理学を勉強したわけでもない。けれど、現場でいろいろな親子を見て、親の考え方、性格などさまざまなことが子どもにとっても影響を与えていると、加藤さんは実感したのだ。

教育だけでなく、野菜を育てるにも、なにをするにも、まずは自分でやってみて、失敗からさまざまなことを学んできたという。僕は現場が先なんだよ。現場が先で学ぶ。それが僕はよかったし、子どもたちにもそうしたいと思うてる」。私も授業をただ座って聞いているよりも、自分自身で現場に行つて感じたことのほうがずっと頭に残っている。じつさいに自分が体験したことは、強く自分のなかに残るものだし、やりなさいと言われてやるよりもずっと自分の力になるのだろう。

加藤さんの生き方

加藤さんは私では思いつきもしないような考えをもっている。しかし、それらはすべて加藤さんの今までの経験があつてのことなのだ。私は加藤さんの暮らし方や考え方はすべて現場に基づいているのだと今回のお話を聞いて知った。

加藤さんはいろいろな人と関わっていくうちに、そうした海外の人とも繋がりをもちようになつたという。そして、多くの国の人たちは、日本のような先進国を目指していることを知つたのだ。しかし、加藤さんはすべての国がそうなる必要はないと考えている。だから加藤さんは今、生き方や暮らしづくりのひとつとして、自然とともに生きる方法をさまざまな国に提案してまわっている。こうして加藤さんは、現場で自分が経験して得た新しい知識を、次々に自分の生活や仕事に活かしていく。

加藤さんの起こす行動は、森のなかにすんでみたり、海外に行つてみたりと、驚くようなことばかりだ。一緒にいると、思いつかないような行動を起こすから、次はなにをする

のだろうと、まわりの人はどんどん引き込まれていく。そして、そうした行動を起こしたあとは、都留にたくさんの方が視察に来るなど、いい変化が必ずおとずれるのだという。活動に関する変化もあるが、私は加藤さんと関わるることによつてその関わった人も変われるように感じた。今回私がお話を聞いたのはわずかな時間だ。しかしそのなかで私は、自分の興味をもつたものには挑戦してみようと考えられるようになった。そんな変化させる力のある加藤さんだからこそ、まわりに人が集まるのだ。



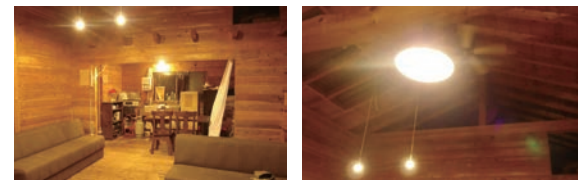
お子さんと一緒にキュウリを収穫する加藤さん

「加藤大吾さん」という人



本学で講師を務める加藤大吾さん(41)。加藤さんは、自分たち家族が食べる分の野菜や穀物を自然農法でつくるなどの、環境に配慮した自給自足の暮らしをしている。私はそんな、加藤さんの生き方、考え方に驚いた。お話をもっと聞きたくて、お宅にお邪魔し、お話をうかがってみた。

遠藤由唯(社会学科1年)=文
廣瀬はづ紀(社会学科4年)=写真



6月24日の夕方、加藤さんの車に乗せていただいてお宅に向かった。

山の小道を抜けると、森の一角に加藤さんのお宅はあつた。庭に車をとめて、車から降りるとすぐに羊のメーという鳴き声に迎えられる。車から家までのあいだには鳥小屋や羊小屋があり、小さな畑もある。家のなかから元気な声がして、小さな男の子がふたり飛び出してきた。加藤さんのお子さんだ。ふたりは加藤さんと一緒に畑のキュウリを収穫し、元気よく家のなかにいるお母さんのもとへ走つていった。そんな光景に頬を緩ませながら、お宅にお邪魔した。

大きく開いた窓や扉から気持ちのいい風が入ってきて、外からはリイリイやジイジイとたくさんさんの生きものの声がする。ふつう、家庭用の白熱灯は一畳あたり30〜40ワットだそうだが、加藤さんのお宅はひとつ7ワットの電球がいくつかあるだけだ。しかし、暗いとは感じなかった。むしろその、包み込むようなやさしい光が、加藤さんの家族の雰囲気にとびつたりだ。

うかがつたのが夕方だったこともあり、夕食をごちそうしていただいた。そのあと、お

宅の隣にあるログハウスに移動してお話をうかがった。

現場で得る

子どもたちが家や畑を走りまわっているのを見て、とてももののびのびしているように思えた。「親ができる最大のことつて、学べる環境をつくつてあげることだと僕は思う。学べつて言うんじゃなくてね。子どもは学べる環境にいれば勝手にやるから」。たしかに加藤さんのお宅は、まわりが木々に囲まれて、生きものの声がそこから聞こえる。都会で暮らしていると関わることの少ない、自然に囲まれて過ごすということ。動物の世話をし、それを食べる。それによつて、命をもらっているんだと考えることができる。これはなかなか体験できることではない。こうした日常から、ふつうに暮らしてはできないことを経験し、自ら学べる環境が加藤さんのお宅にはある。

また、加藤さんはビースフルライフワーカーという肩書きをもっている。「幸せ感あふれる生き方の実践者、提案者」として、おもに自然農法を中心とした農的な暮らしと学

絵から見えるもの

「つる美術」は趣味や学び、それぞれの目的を持って絵を描くかたがたが集う会だ。その展覧会である「つる美術展」が7月2日から5日間、都留市ふるさと会館で開催された。そのことを知ったわたしは、絵を描くかたにお話を聞ける貴重な機会だと思い、美術展に足を運んだ。



『休日の漁港』 今回の展覧会に出した絵は小林さんが10年以上前に描かれたものだ

7月2日、つる美術で講師をされている画家の小林正二さん（55）にお話をうかがえることになった。背が高くてすらりとした佇まいに、白い帽子がトレードマークだ。ご挨拶をすると「そんな大したことも言えませんが」と言いながらも、応じてくださった。

続ける覚悟

小林さんが絵を描いていこうと決めたのは18歳のとき。美術大学に入学し、卒業後は美術関係の企業に就職された。企業に勤めているときも、休日は画力向上も兼ねてスケッチやデッサンをしていたという。しかし勤務してから14年目、その会社がなくなってしまうことに。再就職するよりも絵を描いていこうと、絵描きの道を志したそう。小林さんは地元である都留に戻り、つる美術に入る。当時つる美術で講師をされていたかたの絵が好きで、絵を教わろうと思ったのだそう。

絵を続けてこられた理由は、絵が好きだからというのもあるけれど、それだけではなく「なにか一つこれと決めたら一生続けよう」というくらいの覚悟があつたから」だとおっしゃる。小林さんの意志の強さに「すごい」

としか言えない。どうしてそういうふうになれるんだろうと思っていると、私の性格なんでしょうけど、と言われてしまった。

とは言っても、ずっと同じことをやっていれば、どうしても嫌になってしまうことはあるそう。けれどそういう「嫌になったときこそチャンス」だと小林さんはおっしゃる。苦しいとき、楽しくなるよう工夫をする。そうして描かれた作品は不思議と反響があるのだとか。

わたしも絵を描くのは好きだけど、それを続けていける気はしない。そう思っていることを伝えると、最初はそうですよと小林さん。「わたしも20代のころは好きな絵描き先生の個展にいつては、自分もこんな絵を描きたいぞって。でも真似ばかりしてる自分には才能がないんじゃないかと。真似の先にはかないと食べていけない世界だから」。ついでのようにおっしゃった「真似の先に」という一言から、わたしには想像がつかなかった。絵の世界の大変さを垣間見た気がする。小林さんが人よりも絵が上手いことはもちろんだろう。けれど、絵を描くことに対する小林さんの覚悟の固さがすごいのだと思った。

小林さんの絵

小林さんが絵を描くときは、なにかを見て感動するところからはじまる。そして見た風景や感動を自分の手順に落としこんでいくのだという。そのために、ここは絵になるとか、この絵はおもしろいとか、そういう見かたをいつもするようにしているそうだ。

それから、絵を見た人に喜んでもらえることを考えるという。けれどすぐに「まず自分が嬉しいことも重要」とつけ足す。それから言葉を探すように、見た人がそれを受けて喜んでくれればいいのだと、ご自身も納得したようにおっしゃった。

お話が終わったあとに絵を見せていただいた。「覚悟」という重い言葉や、人よりぬきんでていないというエピソードから、重くて奇抜な絵を勝手に想像していた。けれど小林さんが描いたのは、わたしもいつかどこかで見たような漁港の絵だ。漁港つてきれいだな、海行きたいな、そんな小さな感動がじわりと胸のなかに広がっていくような感覚。「現場写生だから、これが今のわたし（の絵）か」というと違うんですけど、この絵はわ

絵には描いた人が表れると聞いたことがある。絵を描く人にじっさいにお会いして、お話を聞いて、その言葉の意味をあらためて考えるようになった。



絵を見ただけでは、描いた人の顔や生い立ちには分からない。けれどその人らしさは、それだけではないのだ。なにをしたいとか伝えたいとか、目指すものにも、その人の考えかたや人柄が表れる。わたしは、作品には作者の願いや伝えたいことが潜んでいるなんて考えたことがなかった。だから絵を見ても、色が好きだとか、繊細でいいだとか、表面



舟田早帆（社会学科3年）＝文・写真

ご近所 買い物事情



40年前、都留市上谷地域周辺ではスーパーマーケットはファミリコというお店しかなかったらしい。スーパーマーケットが少ない時代がそんなに遠くないことに驚くとともに、当時とはどんなふうに関心を持っていたのかが気になった。そこで当時の買い物のようすを知る人を探すことにした。

ファミリコがあった敷地は、現在おかじま食品館になっている。その周辺に絞って調べると、渡部鉄工所という工場で当時をよく知るかたを見つけた。併設されているご自宅の玄関で「ごめんください」と声をかけると、渡部廣子さん（64）が出迎えてくださった。

昔からかよっているお店

ファミリコを切り口に40年前の買い物についてうかがう。廣子さんは、ファミリコ以外にスーパーマーケットがなかったのによくそこへ買い物に行ったという。かよっていたお店がほかにないかたずねると、国道139号線沿い、都留興譲館高校近くにある滝本商店を教えてくださいました。廣子さんが40年前からかよっている滝本商店は、ご夫婦で経営されている食料品のお店だ。お刺身やお菓子、野菜など大半のものが揃っていて、奥さん手作りのお弁当やお惣菜も売っている。廣子さんは長年かよっているの、お店のご夫婦と仲がいいとおっしゃる。見知った人が作っていると安心できるからと、昔からお惣菜は滝本商店で買っているそうだ。

袋は使わない

廣子さんのお話を聞いて、滝本商店をたずねた。滝本商店は創業80年の歴史があるそうで、現在お店を運営されているご夫婦の旦那さんで三代目だという。

私が当時の買い物のようすについて質問するとお二人は、昔はみんな家から竹や藤のツルで編まれた手提げを持参していたとおっしゃった。また、当時は量り売りが主だったので、買ったものを包むための新聞紙を持ってきたり、豆腐などを買うときは鍋やボウルも持参したりしていたとか。

ほかにも面白い商品の売り方があった。うどんなどの麺類は袋詰めせず売っていたというのだ。お話によると、「もろびた」と呼ばれる木製の容器に麺を二玉ずつ分けて、そこに置いて販売していたそう。もろびたには水気を切るためのすだれが敷いてある。麺類のほか、パンも袋に詰めずテーブルの上にそのまま置いて売っていたという。商品が袋詰めされていなかった理由を、昔は今ほど綺麗さに敏感ではなかったから

だと、お二人はおっしゃる。今は衛生面を気にして、バック詰めや袋詰めが当たり前になっているけれど、40年前は袋に詰める習慣がなかったのだ。

今は袋詰めが当たり前になり、使い終わった袋はゴミになってしまふ。そう考えると昔のほうがゴミが少なくてすみ、経済的だったのではと感じる。衛生的になった反面、ゴミが増えてしまふなど、新たな問題が出てくることもあるのだと思った。

まとめ払い

買ったものは「通い帳」と「台帳」に書いていくのが昔のやり方なのだと、滝本商店の



もろびた。A3用紙程度の大きさで、軽くて底が浅い

旦那さんとおっしゃった。通い帳については廣子さんからもお話をうかがっていた。買い物を買った商品をメモしていく、領収書をまとめたようなもの。いつぼう、台帳というのは売り手が買われた商品を記録するものだ。当時は買った商品の金額を記録し、一ヶ月ごとにまとめて支払う仕組みが当たり前だった。一ヶ月分の代金をお店が肩代わりしていたぐらいなのだから、厚い信頼関係が築かれていたのだろう。

滝本商店では現在も数人いるそうだが、まとめ払いをする人は確実に少なくなっている。即時払いのほうが便利だと感じている人が多いからだと思う。買い物は一ヶ月分まとめてお金を用意するよりも細かく支払うほうがいいだろう。お店側も一ヶ月分の代金を肩代わりするよりその場で払ってもらほうが都合がいいはずだ。

けれどまとめ払いが減った理由はそれだけではないと思う。今は大型店舗が多い。そこでは個人経営のお店よりお客さんが多く、一人ひとりの買い物を記録するのは難しい。だから即時払いが当たり前になったのだろう。

大型店舗が増えたのは当時の人たちが便利さを求めた結果だ。そのことで習慣がひとつ変化したのだ。



買い物のようすは時代ごとに違っている。人がおこなっていることから、人の感覚とともに変わっているのだ。衛生面をより気にするようになったことで、袋詰めが当たり前になった。便利さを求めて変化するだけでなく、おこなわれなくなる習慣があった。40年前と今の買い物のようすにはさまざまな違いがあった。その違いを比較して見えてきたのは当時の人たちと私たちの感覚やものの見方の違いだ。

買い物のやり方は人の望んでいることや、人の感覚の移り変わりを反映して変化している。時代ごとの買い物のようすの違いはその時代ごとの人々の要望や感覚の違いなのだ。

高橋末瑠来（社会学科2年）＝文・写真
小俣漢和（社会学科2年）＝写真

駒の世界と挑戦

「この人は天才だよ」と言いながら貸してもらった冊子があった。将棋の駒に関する手のひらサイズの小さな冊子だ。そこに並ぶ、文字も木目もさまざまな駒たち。それらを手がけたのは都留に住む一人の職人さんだという。

今回お話をうかがわせていただいたのは遠藤正己さん（63）。遠藤さんは駒師「雀峯」という名前で活動している。本学の東隣りにあるご自宅へ約束した時間ぴったりにうかがうと、わざわざお庭に出て待っていてくださった。職人というと寡黙で厳格な人をイメージしがちかもしれないが、遠藤さんはまったくそのような雰囲気ではない。です、ます、がはつきりと聞きとれるとてもいいいな口調で、目を見て淀みなく喋るかただ。不思議なことに、遠藤さんの周りの駒師のかたがたもおしゃべりな人が多いのだと、にっこり笑って楽しみに教えてくださった。

59歳の挑戦

一階の居間に通していただき、さつそくお話をうかがう。遠藤さんはもともと飲食業をなさっていたそう。そちらをやめたあと、将棋サロンのようなものを開きたいと考えていた。そのサロンに必要な駒を探すため、静岡県富士宮市で開かれた将棋の展示会に足を運んだ。そこで今の師匠となるかたと出会い、駒を作らないかと誘っていたのが駒師になるきっかけだったという。その時遠藤さんは59歳。現在遠藤さんは駒師となつて4年目に入った。その時出会った師匠だったからこそ今まで続けられたし、感謝していると遠藤さんはおっしゃる。こんな身近に職人さんがいらつしやつたことも、そのくらいの年齢からまったく違うことをなさろうとした行動力にも驚いた。

遠藤さんが作る駒は「盛り上げ駒」と呼ばれるものだ。駒は木地を彫り、彫り面に沿って漆を入れる「彫り駒」、彫り面を漆で埋めて、木地と漆を真つ平らに研磨する「彫り埋

め駒」、そして遠藤さんの作る「盛り上げ駒」の三種類がある。

盛り上げ駒は駒作りのなかでも最高峰の技術で、駒師誰もができるものではない。盛り上げ駒は彫り埋め駒の段階から、さらに筆で漆を重ねる。そのため、文字の部分が盛り上がっているのが特徴だ。現在その技術を常時使うのは、全国的に見ても40人いるかないかなのだそう。

「今考えてみると、人生にはほら、何回かチャンスがあるとかよくいうじゃないですか。もしかしたらその一つかなと」。遠藤さんがそう切り出す。「で、もうこの年になるとね、いろいろ可能性がどうのつていう年じゃないから。うん、どこまで作り上げれるか分かんないですけど。自分なりに努力はしてね。そんなふうに考えています」。けっして自慢げにするわけでもなく、変わらぬしつかりとした口調でおっしゃる。慢心せず謙虚でありながら、挑戦的だ。私自身将来何になるのか、どうするべきなのか、漠然とした不安を抱いている。それが何だか恥ずかしいような申し訳ないような気がした。

駒の完成

ふだんは二階の自室で作業をおこなうという遠藤さん。今回はわざわざこちらのお部屋まで道具を一式持ってきてくださった。遠藤さんが、上に持ち手のついた、ちょうど大きさも形も顕微鏡を入れる木箱のような箱をとります。箱のなかには何段にも平箱が入れられていた。こちらに完成品が入っているようだ。

そのなかから何箱かを畳の上に出して見せてくださった。蓋をとると、王将から歩兵までが行儀よく並んでいる。駒は、横から見ると白銀色のようなのに、90度回転させると深い鉛色が浮き出てくるといった具合に、見る角度によって色や模様がまったく違う。見飽きるということがまったくなかった。真上から見たり、平箱の置かれた畳の上に伏せるようにして横から眺めたりを繰り返す。溜め息混じりにすごい、綺麗、とぼんやり口にするか、黙って見入ることしかできなかった。駒はそこにあるだけなのに、大声を出したら何



漆を入れるときに使う筆の毛はイタチの尻尾。その先に、微量の漆をつけて駒にのせていく



彫りで使うのは切り出し刀一本のみ

—作業工程—

- ①木地ならし
- ②字母貼り
- ③彫り
- ④目止め
- ⑤漆を入れる
- ⑥乾燥
- ⑦水研ぎ
- ⑧中磨ぎ、面とり
- ⑨仕上げの研ぎ
- ⑩盛り上げ
- ⑪コーティング

今夏の編集部での活動のようすをお伝えします。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

ヤマネの巣箱かけ

6月5日にヤマネの巣箱を本学うら山の木にかけました。巣箱は地面から高さ1 m 50cm くらいのところにかけます。ヤマネはコケを巣材とするので、まわりにコケが生えるような湿気の多いところの木を選びました。また、どんな木を好むのかを調べるために、さまざまな種類、太さの木にかけました。じつは、うら山にヤマネが生息しているのか正確にはわかっていないので、巣箱をかけたのは生息確認のためでもあります。今後巣箱がヤマネに使われるのか気になります。

(小俣溪和)



高さの目安となる棒にあわせながら、入り口を木の幹のほうに向けてくりつけます

お田植え

6月6日にお田植えに参加しました。本誌でたびたびお世話になっている、農家の羽野幸さんの田んぼでお田植えをしました。当日は天候に恵まれ、焼けつくような日差しの下での作業となりました。田んぼ一枚にすべて人の手で稲を植えていくのはやはり大変なことで、田んぼの半分まで植えた時点でみんなすでにへとへと。それでも、地元のベテラン農家さんに励まされながら作業を進め、ついに植えきることができました。翌日ひどい筋肉痛に襲われたことも、頑張った証だと思えばいい経験です。

(舟田早帆)



しばらくその場から動かずにいるとみるみるうちに足が沈んでいき、進むのも一苦労でした

手作りアンズジャム

6月21日に中屋敷フィールドと本学附属図書館横ビオトープにあるアンズを使ってジャムを作りました。深いオレンジ色の熟れたアンズを選んで収穫します。種を取ったら、大粒のアンズは適当な厚さに刻んで、小粒のものは半分に切って砂糖と一緒に煮詰めます。火を通すとアンズの鼻に抜けるような甘酸っぱい香りが格段に強くなります。皮ごと煮つめましたが、ほとんど形がわからなくなりました。できたてを一口食べてみると、あ、すっぱい！でもすぐにしつこさのないさっぱりした甘みが口のなかに広がりました。この季節ならではの味を存分に楽しみました。(長尾泉)



高いところのアンズは枝をたぐり寄せながら収穫しました

か目に見えない大事なものが掻き消されてしまいそうな空気を感じた。今でさえこんなに魅了されてしまうのに、駒はこの状態では完成でないと遠藤さんはおっしゃる。

「自分の考えなんですけど、完全にここで仕上げてないのね。買ってくれた人が5年くらい使って、使っては磨き、使っては磨きしてくれて、で手油と紫外線でね、5年くらい経ったときに一番美しく輝くようになってればいいなと思ってるんですよ。買ったときに、その瞬間が最高じゃなくて。使い込んでいつて」

道具であり工芸品であり芸術品

あまりの駒の美しさに私が「使うのもったいなくなっちゃいますね」と言うと、遠藤さんもじつさいに高い駒を買い、もったいなくて使えなかった経験があったと、ふふふと笑いながら教えてくださった。職人のかたでも使えないことがあるのかと思う。

「こうなってくるとね、ゲームの道具だし、そして工芸品だし、上手な人がやると美術品、

芸術品にもなるからね」

何度も反芻し、ご自身のなかに浸透している考えなのだろう。迷うことなくはつきりと口にされた。

もったいなくて駒を使えない気持ちを理解しながらも、遠藤さんは自分の作った駒は使って欲しいとおっしゃる。それには訳がある。駒は収集家がいるのだそう。実用目的ではなく、観賞用として収集する。それでもいいけれど、使えるように作っているため、できれば使って欲しいのだという。

私も使って欲しい気持ちも使えない気持ちも両方分かる気がした。同時に、なんて贅沢で豊かな次元の世界なんだろうとも思う。道具という価値のみに留まらない永遠に追究し続けられる世界。駒という小さな木の上に繰り広げられる探究。その一端を目にしたような気がした。

駒を見せていただいたあと、遠藤さんが作った駒を使ったストラップをくださった。いろいろなお話をうかがい、駒ができるまでの過程や思いを聞くと、手のひらの上にその駒の一つがあるというのが信じられなかつ

た。絶対に大事にしよう。しまっておこうか、いや、しかし使うためのストラップだし……と何度も葛藤を繰り返し、結局財布につけることにした。

謙虚さ、努力する気持ち、さまざまなものが重なって今の遠藤さんがあるのだと思う。遠い存在でありながら、妙に近い存在にも感じる。不思議だ。天才と、才能と、一言で片づけられるものではない。そう思うのは頑張る人だからなのだろうか。

また、3、4年という歳月の大きさと可能性を感じた。自分は無駄にしていけないだろうかと考える。立ち止まってもいられない気がした。財布に提げた駒のストラップ。財布を出すたび、目につくたびに撫でている。5年後くらいに完成するようにと作られた駒だ。自分も関わってできあがる。5年後か。遠藤さんは、この駒は、自分は、どうなっているのだろう。分からない。けれどお話をうかがった今、抱えるのは、漠然とした不安よりも期待のほうが大きいのは確かだ。

別符沙都樹(国文学科4年)≪文・写真
金原由佳(社会学科3年)≪写真



次回予告

木 (仮)

2015 年 12 月発行予定

FIELD NOTE

no. 86 Sep.

発行人
北垣憲仁 (10)
統括編集者
西教生 (6-7)
編集長
別符沙都樹 (42-44)
副編集長
伊藤瑠依 (1,4-5,8-9,48)
舟田早帆 (38-39)
長尾泉 (12-15)
南條新 (26-27,46-47)
編集
廣瀬はづ紀 (46-47)
加藤萌香 (34-35)
金原由佳 (32-33)
今村遥香 (30-31)
小俣溪和 (18-19)
高橋未瑠来 (40-41)
芦川菜摘 (22-24,45)
遠藤由唯 (11,36-37)
川原岬 (2-3,28-29)
菅野快 (16-17)
山内利奈 (20-21,25)
ロゴデザイン
工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD NOTE (フィールド・ノート) 86 号
発行日：2015 年 9 月 28 日
発行部数：500 部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下 1 階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下 1 階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

夏の元気の源



う だるほどの暑さが続くと、私の誕生日が近づいてきたなと感じます。毎年その日になると、母が私の大好物ばかりを食卓に並べてくれるので、待ち遠しくて仕方ありません。なかでも、必ずつくってくれる手づくりのローストビーフは格別です。オーブンを開けると、ハーブの香りがふわっとただよってきます。出てきたお肉のかたまりを切ると、肉汁がしみだしてきます。手づくりのソースをかけて一口食べれば、夏の疲れなんて一気に吹っ飛んでしまうほどのおいしさが、口のなかに広がります。(遠藤由唯)

ち いさいころから川遊びが好きです。祖父の家の下の方に行き行って泳ぐ、飛び込む、魚を捕る。なかでも好きなのが飛び込みです。川の岸にある岩場を登ってより高いところから、飛び込む。疲れるまで何度も何度も繰り返します。私の元気の源はそこから先。家に帰ると祖父が捕った川魚を焼いてくれています。コンロで焼くのではなく、火をおこしてその火を囲うように魚を並べて直火焼きです。味付けは塩だけですが、その絶妙な加減が最高です。遊んだあとのおいしい魚。また次の日から頑張れます。(小俣溪和)

わ たしは、よく神社に行っています。神様と向かい合うと背筋がピンとのびて心がすっきりするからです。そのなかでもいちばん好きなのは、夏の神社。そこに行き行って手を合わせる。そうするだけで、あたりをつつむ空気の涼しさを実感します。合掌しているときに目を閉じるからなのか、たえずわずかな風であっても全身でその心地よさを感じます。たくさん木々に囲まれている神社では、日差しも和らぎ、社殿を目の前にすると軽やかなセミの鳴き声が聞こえます。神社は私にとってその年の夏を越すエネルギーをもらえる場所です。(川原岬)

桂川の「したはけ」



したはけでカジカという魚を捕る子どもたち（奥隆行写真コレクション=写真）

細い路地をくぐり抜け、草木が生い茂った道を掻き分けると、やっとたどり着いた。ここは桂川の「したはけ」と呼ばれる川辺。昔、川遊びに絶好の場所として子どもたちでにぎわっていたという。ただ、今、私たち以外に人の姿は見当たらない。

少しためらいながら水に足を沈めてみる。冷たさが足先から伝ってきて、ふくらはぎまで冷えてきた。流れに逆らって進んでゆけば、水圧に体勢を崩しそうになるものの、皮膚をなでる水流が心地よくて、このまますっと川に浸かっていたくなる。昔も誰かがこんなふうにしたのだろうか。時代が、あたりの風景が変わってしまったても、人の感覚だけは変わらないのかもしれない。